

# 父親のワーク・ライフ・バランスについての一考察 — 夫婦関係, 家族メンバーの生活, 子どものワーク・ライフ・バランス観との関係 —

尾形和男

学校教育講座

## Father's Balancing Between Work and Family — Exploring Links Between Marital Satisfaction, Life of Family Members and Child's View of Work-Life Balance —

Kazuo OGATA

*Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 問題と目的

女性の社会進出に伴い, 女性の家庭での立場に大きな変化が生じている。

従来子育てに関しての性役割観が存在し, 女性は子育てと家事, 男性は仕事という固定された考えが強かった。しかし, 女性の社会進出と生き方に対する考えの変化が生じ, 結婚しても仕事を継続し, しかも子育ても行う中で自分の趣味や時間を持ちたいという選択肢が増加している(湯沢, 2003)。このことは最近の女性の生き方を反映しているが, 基本的には女性としての生き方の主張であると同時に, 従来のような家事と子育てだけにかかわることをよしとしない考えが増加していることを示すものである。上記のことは, 平均寿命の伸びとともに生じている女性のライフコースの変化の一端を示すものであり, 今後ともこのような生き方は増加してくるものと思われる。

一方, 仕事に携わる男女にかかわる問題として, 仕事と家庭生活をバランスよく送り, その中で精神的にゆとりを保つと同時に, 人間らしく生きようとする考えが進んでいる。この考えは, ワーク・ライフ・バランス(Work-Life Balance: WLB)といわれる。最近富に注目されており, 人間の生き方の多様化に伴い, 仕事へ従事する一方で, 家族や夫・妻とのゆとりのあるかわり, または自分の家庭などでの時間を大切にす, あるいは地域とのかかわりに従事するなど家庭を中心とする生活領域での充実した生活を送りながら, 仕事と家庭生活へのかかわりを両立する姿勢を示している。

ワーク・ライフ・バランスを良好な状態で維持するためには, 仕事と家庭両面のバランスを考えなければならないが, 前者については, 被雇用者の勤務する職場環境に焦点が絞られる。勤務時間, 通勤時間, 給与, 昇進, 厚生施設等会社側が具体的に被雇用者のために取り組まなければならない問題である。これに関しては, 会社側の被雇用者の精神的健康, 労働意欲の確保などについての配慮に基づいた取り組みが期待される。一方, 後者の問題については家庭の問題を始めとして, 夫婦関係の問題など心理学的な視点からの問題が山積している。

ワーク・ライフ・バランスを論じる場合, 家庭と職場へのかかわりに関しての検討がなされなければならないが, これに関する先行研究の中で, 金井(2006)はワーク・ファミリー・コンフリクトの視点から問題を3つの方向から取り上げている(ワーク・ファミリー・コンフリクトの定義については, Thomas & Ganster(1995)の「仕事からの圧力が家庭役割からの圧力と両立しないところから生ずる役割葛藤間の特殊なタイプ」による)。まず, 1つめは家庭からの要求が職場での達成を阻害する葛藤である「家庭→仕事」, 次に, 職場からの要求が家庭での達成を阻害する葛藤である「仕事→家庭」, そして3つめとして, 仕事と家事・育児等で時間がなく慌ただしいことへの葛藤である「時間葛藤」あるいは「仕事と家庭の両立」である。

これに関して, 労働政策研究・研修機構(2008)は全国20歳以上の男女4,000人(有効回答数2,315人, 57.9%)に対する調査を実施し, 男女ともに職場からの要求が家庭での達成を阻害する葛藤である「仕事→家庭」の

コンフリクトが一番大きく、次に仕事と家事・育児等で時間がなく慌ただしいことへの葛藤である「時間葛藤」あるいは「仕事と家庭の両立」によるコンフリクト、そして家庭からの要求が職場での達成を阻害する葛藤である「家庭→仕事」によるコンフリクトが続くことを報告している。

「仕事→家庭」のコンフリクトは職場環境が、うつや燃え尽き症候群など、従業員の精神的健康に大きく影響することは多くの研究が指摘しているところである。その解決には、雇用者側である企業のカウンセリング体制を含めた受け入れ体制などの改善が不可欠であり、企業側の努力を始めとして政治的な政策を主とした取り組みが待たれる。しかし、「仕事と家庭の両立」あるいは「家庭→仕事」によるコンフリクトについては、家庭環境のあり方が大きく影響し、特に「家庭→仕事」によるコンフリクトに関しては家庭環境、中でも家族内の人間関係が大きく影響してくる。

仕事と家庭の両立という視点に焦点を当てた場合、家庭と職場に対して自分の持つエネルギーの振り分け方がワーク・ライフ・バランスの一つの進み方であるが、女性にとって家庭と職業が持つ意味について従来多くの研究が行われてきている。その内容は、大野(2008)によれば、育児不安(牧野, 1983; 大日向, 1988など)、多重役割(戸肥・広沢・田中, 1990; 福丸, 2000など)、家事分担の不公平感(岩間, 1997; 諸井, 1996など)などの視点から検討されており、しかも専業主婦として一人で役割に従事する場合、精神的安定が脅かされ(原・江崎・弦巻・石橋・田嶋, 1998; 諏訪・戸田・堀内, 1998など)、結婚生活への不満に繋がるのが指摘されている(柏木・数井・大野, 1996など)。また、伊藤・池田・相良(2003)及び、伊藤・伊藤・池田・相良(2004a)は、人生の中で夫婦ともに相互に配偶者を最大のサポート源としており、仕事と家事・育児の役割分担意識が依然として根強い我が国では、女性にとってはワーク・ライフ・バランスにかかわる問題は多く存在する。稲葉(2003)はこれに関連して、妻のストレス軽減には夫の情緒的サポートが最大要因として存在することを指摘している。

また、家庭と職業の両立に向けて生活を進める場合、具体的な生活そのもののあり方が問われるが、山口(2007)は、ワーク・ライフ・バランスの指標として考えられる家庭での過ごし方と夫婦関係満足度の関係について報告している。それによれば、休日は「くつろぎ」「家事・育児」「趣味・娯楽・スポーツ」、平日は「食事」「くつろぎ」などの夫婦の共有生活時間数と夫の育児分担割合など、夫婦の共有するワーク・ライフ・バランスに関する変数が、夫婦関係満足度に大きく影響すること、そして夫婦関係の満足度は結果として仕事に影響を与えると考えられるので、夫婦を中心とする家族成員が自ら積極的・自主的にワーク・ライ

フ・バランスに関わる生活を、夫婦相互のかかわりの中で形成する必要性があることを指摘している。また、金井(2002)は、ワーク・ファミリー・コンフリクトの観点から、東京都と愛知県下の民間企業に働く男女正規従業員502名を対象とした調査を実施し、共働き家庭の男性において、家庭より仕事に強くかかわっている場合は家庭からの要求が職場での達成を阻害する葛藤である「家庭→仕事」が有意に高いこと、そして仕事と家庭の両方に強くかかわっている人ほどワーク・ファミリー・コンフリクトが有意に低いことを指摘し、個人が仕事と家庭のどちらの領域を自己の態度や行動の基準としてより強く持っているかが、ワーク・ファミリー・コンフリクトの決定因になっているとした。

一方、仕事と家庭へのかかわりのバランスに関して、Innstrand, Langballe, Espnes, Falkum & Aasland(2008)は、法律家、バス運転手、情報技術職員、教師、医師、牧師、看護師などそれぞれ8種類の職種とそこに勤める人2,235人について家庭と仕事へのかかわりに関し縦断的な調査を行い、家庭より仕事に強くかかわっている場合は少なくとも仕事から遠ざけることがワーク・ファミリー・コンフリクトを低下させる要因として作用するというを示している。これら一連の報告と関連して、ワーク・ファミリー・コンフリクトは仕事満足感や家庭満足感、生活全体との満足感を引き下げる効果を持ち、現代人の精神健康に深く関わっている、ということも合わせて指摘されている(金井・加藤・西村・鈴木・藤本, 2001)。

上記のように、家庭と仕事とへのかかわりは相方向へのベクトルとして複雑に関連しているものの、両立へと向けた方向が求められている。家庭と仕事の両方を扱い、より具体的にワーク・ライフ・バランスを検討することがさらに必要である。

ワーク・ライフ・バランスについて論ずる時、職業に就いている男女それぞれ別々に一つの単位として扱い、それぞれが受ける身体的、精神的問題を論ずることが多いようである。しかし、現実問題として、個々の家族成員は家族の中のメンバーとして生活しており、そのために家族のメンバーの誰かがもたらした行動や結果が他のメンバーにも影響し、結果として徐々に円環的に相互に影響し、家族成員のみならず家族全体が影響を受けることになる。つまり、家族システム論の視点からみた場合、夫婦に焦点を当て夫婦をそれぞれ単位として捉える際に夫婦の中にも、夫(あるいは妻)からの働きかけがあり、それに対する妻(夫)として反応があり、それからさらに相互の行動が継続的に派生し続けて行くことになる。このことに関して、大野(2008)の指摘にもあるように、妻が抱える育児不安、家事分担の不公平感などは、夫の日常示す行動が妻との夫婦生活の中で継続して行われてきた結果生じるこ

ともあり得る。このことは、性役割分担意識が依然として根強く存在している我が国において、妻が夫から影響を受けながら妻自身のワーク・ライフ・バランスの調整を図らざるを得ない状況が多く存在し、それに伴う精神的ストレスなどの問題も多く存在することを示すものである。当然のこととして、夫から受ける影響は、妻だけではなく妻を介して家族成員である子どもにも及ぶことは家族システム論の視点から十分考えられることである。したがって、妻や子どもの生活状況に焦点を当てたとき、夫の家庭関与と仕事関与のあり方が直接的・間接的に影響をもたらすことを視点において論じることが不可欠である。

このような視点から本研究ではワーク・ライフ・バランスに関して、大学生を持つ共働き家庭の夫婦に焦点を当てて次のことを明らかにすることを目的とする。まず第1に、夫の家庭と仕事の両変数へのバランスの取り方が夫婦関係満足度にもたらす影響を検討する。合わせて、家族内のメンバーが相互に一緒に過ごす時間、会話時間、会話の内容など家族にどのような影響をもたらしているのかについても検討する。ここで、青年期の子どもを持つ夫婦を取り上げたのは次の理由による。Carter & McGoldrick (1980) の提唱する家族発達段階論において、青年期の子どもを持つ家庭は第4段階に相当し、そこに存在する発達課題として、発達に必須の家族システムの第二次変化を取り上げている。しかも、その中には「中年の夫婦関係、職業上の達成に再び焦点を合わせる」という内容が存在しており、中年夫婦の家庭と職業の再構成、言葉を換えれば仕事と家庭生活の両立が求められる時期に相当し、ワーク・ライフ・バランスという観点に立った生活様式が特に求められていると考えられるからである。第2に、ワーク・ライフ・バランスは従来職業に就いている成人男女を基本として、その実態について検討することが多いのであるが、青年期男女が将来的に自分のワーク・ライフ・バランスをどのようにみているのかということも合わせて検討する。青年期に焦点を当てた先行研究として高校生の学校生活との関係についての調査がみられるが(家族社会心理学研究所, 2008; 太田, 2009), 家庭生活との関係から検討されたものは見あたらない。自分の将来のワーク・ライフ・バランス観というものについての形成要因は種々存在すると考えられるが、少なくとも自分が生活してきた家庭、特に父親のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係を始めとして家庭にもたらす影響も重要な一要因として存在していると考えられる。

以上のように、共働き家庭の父親のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係と子どもである青年のワーク・ライフ・バランス観に与える影響について分析し、家族システムの中に形成されるワーク・ライフ・バランスにどのような影響をもたらすのかということについて

も合わせて検討する。

## 方 法

### 1. 調査対象者

愛知県と東京都の大学生・大学院生338名(学部4年生89名, 3年生52名, 2年生49名, 1年生125, 大学院修士課程1年生23名。男性133名, 女性205名。平均年齢20.1歳。男性20.05歳, 女性20.14歳)。学生の両親については共働き家庭123世帯(パートタイムは除く), 専業主婦家庭213世帯, その他2世帯。

### 2. 調査用紙

調査用紙は、①調査対象学生の性別、年齢、父親母親の職業を問うもの。②家庭での父親の関与状況について問う17項目(尾形, 2005)。③夫婦関係満足度について問う6項目(諸井, 1996)。④夫婦の家庭内での仕事分担を問う11項目(諸井, 1996)。⑤夫婦の家庭内での仕事分担について学生の要望を問う11項目(諸井, 1996を参考に作成)。⑥家族と平日・休日に一緒に過ごす時間を問う項目(林・岡本, 2005)。⑦家族との過ごし方について問う項目(林・岡本, 2005)。⑧家族との会話時間を問う項目(林・岡本, 2005)。⑨家族との会話の内容を問う項目(林・岡本, 2005)。⑩学生の家族に対する家族アイデンティティを問う37項目(林・岡本, 2005)。⑪ワーク・ライフ・バランスの意味について問う項目(家族社会心理学研究所, 2008)。⑫学生の将来のワーク・ライフ・バランス観を問う4項目(家族社会心理学研究所, 2008)。上記②～⑤, ⑩の質問紙は5段階評定, ⑫の質問紙は4段階評定である。調査は、授業の中で説明し、協力してくれる学生に配布し記入後回収した。

本研究では、今回の目的から質問紙⑩⑪を除く10種類の質問紙の分析を行った。

### 3. 調査時期

2009年7月～8月。

## 結 果

### 1. 父親の家庭と仕事へのかかわりについての質問紙の構造化

父親の家庭と職場へのかかわりのバランスを調べるための質問紙⑤について、因子分析(主因子法, Promax 回転)により因子の抽出を行った。その結果、因子負荷量の絶対値.40以上を基準に2因子13項目を採用した(Table 1)。

第1因子は項目1「父親は休暇の時、家族との会話を大事にしている」、項目6「父親は家族で食事をするとき、仕事のことだけでなくいろいろな話をしてくれる」、項目7「父親は休暇の時、みんなを誘って出かけることがある」などの項目の負荷が高く、家族への関

与度に関する内容を指しているので「家族への関与」と命名した。また、第2因子は項目16「父親は家族と話をするとき、仕事のことが多い」、項目14「父親は仕事のことで悩んだり喜んだりしている」、項目11「父親は休暇の時でも仕事のことが頭から離れないようである」などの項目の負荷が高く、仕事への関与度を示す内容であるので「仕事への関与」と命名した。

次に、2因子それぞれの信頼性を確認するために Cronbach の信頼性係数を算出したところ、それぞれ  $\alpha = .83, .71$  であった。第2因子は若干低い値ではあるものの信頼性を有していることと、父親の仕事関与にかかわる内容を示しているので使用した。

## 2. 父親のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係満足度

父親の家庭と仕事への関与のバランスと夫婦関係満足度の関連性を検討するために、父親のワーク・ライフ・バランスを構成する家庭関与と仕事関与の各下位尺度の平均点を基にして4つのグループを設定した(なお、下記の4グループ形成以降家庭環境の類似している共働き家庭に絞って分析を実施した)。

具体的には、家庭関与高・仕事関与高(HH群)、家庭関与高・仕事関与低(HL群)、家庭関与低・仕事関与高(LH群)、家庭関与低・仕事関与低(LL群)の4群である。また、それぞれの群に属する夫婦関係の差異について一元配置分散分析により検討した。

Table 2によれば、4群の間に有意差が確認された。多重比較(Tukey法)の結果、HH群はLL群よりも有意に高い値を示した。また、HL群はLH群とLL群の

両群よりも有意に高いことが示された。

この結果から、父親が家庭関与と仕事関与に高い値でかかわっている場合と、仕事よりも家庭関与により高くかかわっている場合に夫婦関係満足度が良好であることが確認された。つまり、家庭コミットメントを中心として仕事コミットメントも行われているという状況のワーク・ライフ・バランスが望ましいことが示された。

## 3. 父親のワーク・ライフ・バランスと家族成員の家庭生活

父親の家庭関与と仕事関与のバランスが家族内どのような影響をもたらしているのかという視点から、家族成員である学生の家庭で過ごす時間や会話について検討を加えた。具体的には、平日と休日に家族と過ごす時間、家族との過ごし方(1.テレビ・ビデオを一緒にみることが多い、2.ジョギングや散歩、あるいはショッピングをすることが多い、3.食事の準備をすることが多い)、一日に家族と会話する時間、会話の内容(1.「おはよう」「ただいま」などの挨拶が多い、2.その日の出来事についての会話が多い、3.自分の悩みや問題などの相談が多い、の順により本質的な会話を問う)をそれぞれ取り上げた。

ここでは、前述の4群(HH, HL, LH, LL)に上記のそれぞれの項目に属する人数に基づいて、 $\chi^2$ 検定を行った。

その結果、平日に家族と一緒に過ごす時間の長さ、家族との過ごし方、会話の内容それぞれについては4群の間には有意差は確認されなかった。しかし、休日

Table 1 父親の家庭関与と仕事関与に関する因子分析結果

項目	因子	I	II	$\alpha$	
1.父親は休暇の時、母親と一緒にいる時間を大事にしている		<b>.829</b>	<b>.037</b>	<b>.83</b>	
6.父親は家族で食事をするとき、仕事のことでなく いろいろな話をしてくれる		<b>.794</b>	<b>.089</b>		
7.父親は休暇の時、みんなを誘って出かけることがある		<b>.665</b>	<b>-.046</b>		
5.父親はあなたの将来のことについてよく相談にのってくれる		<b>.611</b>	<b>.185</b>		
9.父親は忙しくて、家族との会話が少ない		<b>-.608</b>	<b>.273</b>		
12.父親は休暇の時家族と関わらず、一人でのんびりしている ことが多い		<b>-.554</b>	<b>.141</b>		
8.父親は自分の生き方を話してきかせてくれる		<b>.501</b>	<b>.356</b>		
16.父親は家族と話をするとき、仕事のことが多い		<b>-.167</b>	<b>.651</b>		<b>.71</b>
14.父親は仕事のことで悩んだり喜んだりしている		<b>.096</b>	<b>.605</b>		
11.父親は休暇の時でも仕事のことが頭から離れないようである		<b>-.290</b>	<b>.548</b>		
15.父親は仕事が順調なとき、家族と良く話しをする		<b>.129</b>	<b>.523</b>		
13.父親の様子から仕事がうまく行っているかどうかわかる		<b>.037</b>	<b>.465</b>		
4.父親は仕事の話をするとき生き生きしている		<b>.385</b>	<b>.430</b>		
	因子間相関	I	II		
	I				
	II	<b>.076</b>			

(項目番号のアンダーラインは逆転項目を示す)

Table 2 父親のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係満足度

父親のワーク・ライフ・バランス	夫婦関係満足度
父親の家庭関与高・仕事関与高(HH) 42組	3.33 (.76)
父親の家庭関与高・仕事関与低(HL) 23組	3.52 (.54)
父親の家庭関与低・仕事関与高(LH) 27組	2.81 (.88)
父親の家庭関与低・仕事関与低(LL) 27組	2.20 (.87)
<i>F</i> 値	14.70***

\*\*\* $p < .001$  \* $p < .05$   
(上段数字は平均値、( )内の数字は標準偏差値を示す。)

Table 3 学生が休日に家族と過ごす時間の人数分布

共有時間 父親のワーク・ライフ・バランス	1時間未満	1時間～ 2時間未満	2時間～ 3時間未満	3時間～ 4時間未満	4時間～ 5時間
	家族関与高・仕事関与高(HH)	8(38.1) .3	1(16.7) -.10	5(20.0) -1.8	7(46.7) 1.0
家族関与高・仕事関与低(HL)	4(19.0) .1	0(0) -1.2	1(4.0) -2.1*	4(26.7) .9	13(25.0) 1.6
家族関与低・仕事関与高(LH)	2(9.5) -1.6	2(33.3) .6	10(40.0) 2.3*	2(13.3) -.9	11(21.2) -.4
家族関与低・仕事関与低(LL)	7(33.3) 1.2	3(50.0) 1.6	9(36.0) 1.7	2(13.3) -1.0	7(13.5) -2.3*

\*  $p < .05$   
(上段の左数字は人数、( )内は%を示す。下段の数字は残差を示す。)

に家族と一緒に過ごす時間の長さ、一日に家族と会話をする時間、それぞれについては有意差(あるいは傾向)が確認された(それぞれ、 $\chi^2(12) = 21.95, p < .05$ ;  $\chi^2(12) = 18.75, p < .10$ )。

休日に家族と過ごす時間の長さについて Table 3 に示すように、HH 群 HL 群ともに一日家族と過ごす時間が 3～4 時間未満、4 時間～5 時間が多く、LH 群と LL 群では 1 時間から 2 時間、2 時間～3 時間が多い。残差分析の結果、LH 群では 2 時間～3 時間未満、LL 群では 4 時間以上が少なくなっていることが確認され、特に LL 群の学生は休日に家族揃って 4 時間以上過ごしていると認識している人数が少ないことが示された。

また、一日に家族と交わす会話時間については Table 4 に示すように、HH 群と HL 群に 3 時間～4 時間未満、4 時間～5 時間に集中している。残差分析の結果 HH 群において 4 時間～5 時間の実測値が高く、HH 群に属する学生は家族と多くの会話をしていると認識していることが示された。

#### 4. 学生のワーク・ライフ・バランス観形成に関連する要因の検討

学生のワーク・ライフ・バランス観については 4 種類の内容を調査したが、その結果、「仕事や家庭生活・地域・個人の生活のバランスを優先したい」「仕事よりも家庭生活を優先して生活したい」「仕事よりも地域・個人の生活を優先したい」「仕事を優先して生活したい」の、順に高かった(平均と SD はそれぞれ順に、3.37 (.71); 3.03 (.72); 2.53 (.75); 2.07 (.63))。仕事よりも家庭を重視し、地域や個人の生活をその次に重視したい、という結果が得られ、学生は理想的なワーク・ライフ・バランスの視点を保持していることが理解できる。

このワーク・ライフ・バランス観形成にどのような要因が関連しているのであろうか。ここでは、父親のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係満足度との関係について検討した。

まず、父親のワーク・ライフ・バランスとの関係について検討するため、HH, HL, LH, LL の 4 群それぞれの学生のワーク・ライフ・バランス観について一元配置分散分析を行った。しかし、ワーク・ライフ・

Table 4 学生が一日に家族と交わす会話時間の人数分布

父親のワーク・ライフ・バランス	会話時間				
	1時間未満	1時間～ 2時間未満	2時間～ 3時間未満	3時間～ 4時間未満	4時間～ 5時間
家族関与高・仕事関与高 (HH)	11 (26.8) -1.2	14 (32.6) -.2	3 (20.0) -1.2	6 (50.0) 1.2	6 (85.7) 3.0**
家族関与高・仕事関与低 (HL)	6 (14.6) -1.0	7 (16.3) -.7	5 (33.3) 1.4	4 (33.3) 1.3	1 (14.3) -.4
家族関与低・仕事関与高 (LH)	11 (26.8) .7	11 (25.6) .5	4 (26.7) .4	1 (8.3) -1.3	0 (0) -1.5
家族関与低・仕事関与低 (LL)	13 (31.7) 1.5	11 (25.6) .4	3 (20.0) -.4	1 (8.3) -1.2	0 (0) -1.5

\*\*  $p < .01$ 

(上段の左数字は人数、( )内は%を示す。下段の数字は残差を示す。)

バランスの4項目それぞれについては有意差が得られなかった。

次に、夫婦関係とワーク・ライフ・バランスとの関連性を検討するために、夫婦関係満足尺度、夫婦仕事分担(父親がかかわる程得点が高い)、夫婦仕事分担に対する学生の要望(母親への要望が高くなる程得点が高い)の下位尺度得点と学生のワーク・ライフ・バランスの4項目それぞれの得点間についてピアソンの積率相関を算出した(Table 5)。その結果、夫婦関係満足度と「仕事や家庭生活・地域・個人の生活のバランスを優先したい」とするワーク・ライフ・バランス観との間に有意な正の相関が得られた。この結果から、良好な夫婦関係が学生のワーク・ライフ・バランス観形成と関連性を有することが示された。

## 考 察

以上の結果を基に考察を加えるが、結果の順に考察を加え最後に全体的な考察を加えることにする。

まず、本研究では、父親のワーク・ライフ・バランスそのものが、家族全体にどのような影響をもたらしているのかについて検討することが主目的である。その際に、父親のワーク・ライフ・バランスの指標とし

て、家庭関与と仕事関与の2つの側面から捉え、家庭関与の高低と仕事関与の高低に基づいてHH, HL, LH, LLの4群を形成しそれを基本とした。結果として、夫婦関係満足度との関係について、HH群はLL群よりも有意に高い値を示し、HL群はLH群とLL群の両群よりも有意に高いことが示された。HH, HL両群ともに共通していることは、基本的に父親が家庭関与に高くかかわっているということである。HH群はワーク・ライフ・バランスの視点から、家庭と仕事の両立に近い状況にある家庭であり、現代社会においては理想型とも考えられる。また、HL群はHH群よりも仕事への関与が低い家庭であるが、家庭関与はHH群同様に高い。このことから、良好な夫婦関係を形成するためには、ワーク・ライフ・バランスという視点から、父親は家庭と仕事の2領域、あるいは家庭に高い関与を持つというように、家庭への関与に重点を置いたかかわりが必要であることが示されたといえよう。しかし、家庭と仕事の両領域へのかかわりにより生ずるコンフリクトに関しては、共働き家庭の男性において、仕事と家庭の両方に強くかかわっている人ほどワーク・ファミリー・コンフリクトが有意に低いことが指摘されており(金井, 2007)、本研究の結果と合わ

Table 5 学生のワーク・ライフ・バランス観と夫婦関係満足、夫婦役割分担との関係

ワーク・ライフ・ バランス観	夫婦関係			
	仕事を優先して 生活したい	仕事よりも家庭生活を 優先して生活したい	仕事よりも地域・個人 の生活を優先したい	仕事や家庭生活・地域・個人 のバランスを優先したい
夫婦関係満足度	-.040	.126	.128	.203*
夫婦役割分担	.097	-.011	.096	.088
夫婦役割分担に対する 学生の要望	.088	-.080	-.061	-.064

\* $p < .05$

せて考察すると、2領域に高い関与を持って生活している場合には、ワーク・ファミリー・コンフリクトが低くなり、家庭での生活を円滑に送ることが可能となっているとも考えられる。また、HH群と同様にHL群でも良好な夫婦関係が形成され、父親の家庭への関与が両群ともに共通して高いことが指摘できる。このことについて、山口（2007）による、休日は「くつろぎ」「家事・育児」「趣味・娯楽・スポーツ」、平日は「食事」「くつろぎ」などのワーク・ライフ・バランスの指標として考えられる家庭での過ごし方が夫婦関係満足度に影響するとの指摘にもあるように、本研究の結果はこれを裏付ける結果と考えられる。

これらの結果から、ワーク・ライフ・バランスは夫婦関係満足度を高めることが示されたが、尾形（2005）は、家族としてのあり方としての家族機能形成は夫婦関係が核になることを指摘している。家族機能は家族成員である子どもの精神発達にも間接的な影響をもたらすことにもなることをさらに合わせてみると、ワーク・ライフ・バランスは生活の送り方を追求するだけでなく、家族成員の精神的状況にまで波及する問題と捉えることができる。

また、学生のワーク・ライフ・バランス観について、夫婦関係満足度と「仕事や家庭生活・地域・個人の生活のバランスを優先したい」という学生の抱くワーク・ライフ・バランスとの間に、有意な正の相関が得られており、非常に興味深い結果が得られた。この結果は夫婦関係の影響力が存在することが示唆されると同時に、父親のHHとHLというワーク・ライフ・バランスが夫婦関係満足度を高めるということと合わせてみると、父親を基盤にした夫婦関係のあり方の重要性が伺える。したがって、父親と夫婦関係、そして学生のワーク・ライフ・バランスの3変数の関連性についてさらに検討を加える必要があると考える。

次に、父親の家庭関与と仕事関与のバランスが家族成員の生活状況にどのような影響を持つのかということについて検討した。本研究では、LL群の学生が4時間以上家族揃って過ごしていると認識している程度が低いことが示された。このことは、LL群がHH、HLの両群に比較して夫婦関係満足度得点が低いことから、父親が家庭と仕事の領域に余りかかわらず、家庭と仕事から距離を置いているものとも考えられ、夫婦関係を始めとして、家族としてのコミュニケーションを中心とする相互の交流が不足している状況を反映しているものと推測される。また、一日に家族と会話をする時間については、HH群に属する学生は家族と多くの会話をしていると認識していることが示された。この結果もHH群が夫婦満足度において高い値を示していることと合わせて考えると、LL群とは逆に夫婦関係が良好であり、夫婦を中心とするまとまりの中で、家族成員相互のコミュニケーションが取れてお

り、家族として民主的で凝集性が高く、家族としてまとまっている状況を反映しているものと考えられる。これらの結果から、父親の家庭と仕事の両領域へのかかわりが高い状況で両立している場合には、夫婦関係を中心とする家族のまとまりが促進されるものと考えられる。したがって、父親のワーク・ライフ・バランスのあり方は家族成員が家族の中で一緒に過ごす時間と会話時間など、家族のあり方を左右する核の部分に影響するものと考えられる。しかし、今回の調査では、その他の変数である、一日に家族と交わす会話の内容については父親のワーク・ライフ・バランスの4群間には有意差が確認されなかった。この結果については、質問の内容をより具体的な生活に合わせたものにするなどの工夫が求められると考える。

さらに、学生のワーク・ライフ・バランス観形成要因についての検討から、父親自身のワーク・ライフ・バランスとの関連性が得られなかったが、夫婦関係の良好さがワーク・ライフ・バランス形成に関係することも示された。これは、毎日生活している家庭という場での夫婦の間に展開される影響力の大きさを示すものであろうか。また、夫婦関係は父親のワーク・ライフ・バランスとの関係が強いこともあり、父親のワーク・ライフ・バランスに基づいた検討がさらに求められると考える。それと同時に、学生のワーク・ライフ・バランス観については家庭以外にも学生生活、実社会の動きについての認識など他の要因も多く存在すると考えられるので、家庭と大学生活、社会との関係も含めた検討が必要と考える。

一方では前述のように、夫婦関係は家族全体の状況である家族組機能形成に影響をもたらすことから、父親のワーク・ライフ・バランスの持つ意味合いとその家族成員の発達・適応については今後引き続き検討を重ねる必要があると考える。Carter & McGoldrick（1980）による家族発達段階の4段階にあたるこの時期は、子どもたちが家族から巣立ち、そして夫婦が改めて相対して新しい夫婦関係を構成していく段階でもある。また、家族成員の発達・適応に関しては、学生は社会人として実社会に出て行くための準備状態を成し遂げている時期でもあり、家族からの精神的分離、経済的独立などの重要な発達課題に直面し取り組んでいる。したがって、家族と一緒に過ごす時間や、それに伴う会話もこの時期、重要性を増すことになると思われる。

今回の調査では学生の内省を取ることにはしていないが、父親のワーク・ライフ・バランスについて学生の受け取り方などを含めた調査がさらに不可欠である。

## 引用文献

Carter, E. A., & McGoldrick, M. (Eds) 1980 *The family life cycle — a framework for family Therapy*. New York : Gardner.

- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫 1990 多重な役割従事に関する研究—役割従事タイプ、達成感と男性生、女性生の効果—社会心理学研究, **5**, 137-145.
- 福丸由佳 2000 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連 家族心理学研究, **14** (2), 151-162.
- 原孝成・江崎明子・弦巻千文・田嶋明子 1998 父親の育児態度が母親の満足度に及ぼす影響 日本発達心理学会第9回大会発論文集, 348.
- 林奈那・岡本裕子 2005 青年の家族に対する関与と家族アイデンティティ発達との関連 家族心理学研究, **19** (1), 13-29.
- 稲葉昭英 2005 家族と少子化 社会学評論, **56**, 37-54.
- Innstrand, S. T., Langballe, E. M., Espnes, G. A., Falkum, E., & Aasland, O.G. 2008 Positive and Longitudinal study of reciprocal relations. *Work & Stress*, vol. **22**, No.1, 1-15.
- 伊藤裕子・池田政子・相良順子 2003 職業生活と家庭生活が夫婦の心理的健康に及ぼす影響—ジェンダー・ギャップの視点から 平成13-14年度科研費報告書
- 伊藤裕子・伊藤あや子・池田政子・相良順子 2004a ソーシャルサポートと夫婦の心理的健康—中年期と老年期の比較を通して 聖徳大学研究紀要, **15**, 47-53.
- 岩間暁子 1997 性別役割分業と女性の家事負担不公平感—公平価値論・勢力論・衡平理論の実証的検討—家族社会学研究, **9**, 67-76.
- 金井篤子・加藤容子・西村もゆ子・鈴木淳子・藤本哲史 2001 仕事と家庭のバランスを考える—ワーク・ファミリー・コンフリクトをめぐる—経営行動科学学会年次大会発表論文集(4), 5-6.
- 金井篤子 2002 ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスへの影響に関する心理的プロセスの検討 産業・組織心理学研究, **15** (2), 107-122.
- 金井篤子 2006 ワーク・ファミリー・コンフリクトの視点からのワーク・ライフ・バランス 季刊家計経済研究, **71**, 29-35.
- 柏木恵子・教井みゆき・大野祥子 1996 結婚・家族観の変動に関する研究(1) - (3) 日本発達心理学会第7回大会発表論文集, 240-242.
- 家族社会心理学研究所 2008 青少年のワーク・ライフ・バランスに関する調査研究 四日市男女共同参画課調査・研究事業報告書, 1-32.
- 牧野カツコ 1983 働く母親と育児不安 家庭教育研究紀要, **4**, 67-76.
- 諸井克美 1996 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, **10** (1), 15-30.
- 尾形和男 2005 子どもの視点からみた次世代に求められる父親像—父親の仕事と家族への関わり、子どもの父親に対する親和性に基づく分析的研究—学校法人昌賢学園論集, **4**, 107-128.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書房
- 大野祥子 2008 男性の自立とワーク・ライフ・バランス [柏木恵子監修 塘利枝子・福島朋子・永久ひさ子・大野祥子編 発達家族心理学を拓く ナカニシヤ出版]
- 太田 仁 2009 ワーク・ライフ・バランスに対する態度形成要因の研究 —高校生のワーク・ライフ・バランスに対する態度形成に関連する要因の検討— 日本心理学会第73回大会発表論文集, 153.
- 労働政策研究・研修機構 2008 第5回勤労生活に関する調査(2007年) JILPT 調査シリーズ, No.41, 1-296.
- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる 1998 母親の育児ストレスと保育サポート 川島書店
- Thomas, L., & Ganster, D. C. 1995 Impact of Family-supportive Work Variables on Work-family Conflict and Strain: A Control Perspective. *Journal of Applied Psychology*, **80** (1), 6-15.
- 山口一男 2007 夫婦関係満足度とワーク・ライフ・バランス 季刊家計経済研究, **73**, 55-60.
- 湯沢彦彦 2003 データーで読む家族問題 日本放送協会出版 (2009年9月9日受理)